（別紙３）

公表　児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	いきるちから５			
○保護者評価実施期間	令和７年　2月　15日		～	令和7年　2月　28日
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	19人	（回答者数）	14人
○従業者評価実施期間	令和7年　3月　3日		～	令和7年　3月　7日
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	9人	（回答者数）	9人
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年　3月　10日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	配置されている職員の数が多い。	児童一人ひとりを観察する精度が高く、２，３歩先を考えた支援が可能。	スタッフ一人ひとりの観察力向上、児童に対する課題の明確化、支援計画への理解の深化など
2	支援環境に応じて事業所を柔軟に変えられる。	未就学児でも能力的に年上の児童との関わりが良い方向に進みそうであれば、多機能型の事業所への移行を促している。	いきるちから１～５それぞれの特色の言語化を進め、様々な課題に対しての解決方法を明確化していく。
3	他業種からの転職者が多い。	福祉分野以外からの職員もおり、一般的な療育、保育のアプローチでないアイデアを取り入れた支援施策を行っている。	今後１０年～１５年先の社会を見据えた既成概念にとらわれない生活スタイルを創造、取り組みに反映させていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	療育の世界に入ってきたばかりのスタッフが多く、経験値が少ない。	療育の経験は少ないが、今までの職業で培ってきた感覚を生かしていけるように業務分担を図っている。	物事の原理原則を理解しているスタッフはフィールドが変わっても「こう来たらこう」と感覚的に理解が早く、行動にも反映している。それぞれのものの見方を理解して、パフォーマンスの向上を目指す。
2	ドライバーの支援体制の構築。	送迎中のやり取りも支援としての時間として大事に考えていきたいところ、車内具体的な話の内容など、職員とドライバーの情報共有する機会がほしい。	送迎の際に児童の様子を見守ると同時に、どんなことを話したのかをモニタリングすることで道中でも「個別の支援」をしている認識を、ドライバーにも理解してもらう。
3	支援内容にばらつきがある。	対象年齢が年少～小3までと、幅が広い分、全体が統一された取り組みができず、中央値を取って考えられた取り組みになる。	一元的に取り組みのルールを守ってする事以外にも、他児との関わり方、ゲーム内での役割、ルールをどれくらい理解しているか？年齢によってレクの内容を変えるなどを意識して、関連する能力についても観察していく。